

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	
イ ネ	葉いもち	やや多(並)	チ ャ	チャノキイロアザミウマ	山城: やや少(やや少)	
	ニカメイチュウ (第 1 世代)	やや少(やや少)		カンザワハダニ	クワシロカイガラムシ	丹波: 並(やや少)
	ヒメトビウンカ	並(並)				丹後: 並(並)
	縞葉枯病	並				山城: やや少(並)
	ツマグロヨコバイ	少(少)				丹波: 並(やや多)
イネミズゾウムシ	並(やや多)	チャノミドリヒメヨコバイ	山城: 並(並)	丹波: 並(やや少)		
ナ シ	黒斑病	やや多(やや多)	野菜類	アブラムシ類と モザイク病	丹波: 並(やや少)	
	黒星病	やや多(やや多)			丹後: やや多(並)	
	ハダニ類	並(並)	果菜類	ハダニ類 アザミウマ類 疫病・褐色腐敗病 うどんこ病	山城: やや少(やや多)	
ブドウ	べと病	やや多(やや多)			丹波: やや少(少)	
カ キ	落葉病	やや多	キュウリ	べと病	丹後: やや多(多)	
	うどんこ病	並(多)			斑点細菌病	多(多)
カンキツ	ハダニ類	やや少(やや少)	ネ ギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや多(やや多)	
果樹全般	カメムシ類	多(やや多)			アブラナ 科野菜	コナガ
チ ャ	炭疽病	山城: やや少(少)	アブラナ 科野菜	コナガ		
	もち病	丹波: 並(並)			並	
		丹後: やや多(やや多)	ネ ギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや少(並)	
	山城: 並(並)	やや多(並)				
	丹波: 並(並)	やや多(並)				
チャノコカクモンハマキ	山城: やや多(やや少)	アブラナ 科野菜	コナガ	やや多(並)		
丹波: やや多(やや多)	並(少)					
チャノホソガ	山城: やや少(やや少)	丹波: やや少(やや少)	丹後: やや少(少)			

※ 平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	14
参考	
I 近畿地方の気象 1 か月予報	15
II 用語の定義	15

<p>農作物病虫害情報 サービスホームページ https://www.pref.kyoto.jp/byogai/</p> 	<p>病虫害予察情報等メール サービス https://www.pref.kyoto.jp/bojoshu/mailservice/mailservice.html</p> 
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、補植用苗で発生を認めていない（平年並）。
- (2) 前年の穂いもちの発生量はやや多い（+）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑が進展したり、胞子の形成量が高まったりする。
- (2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- (3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

2 ニカメイチュウ（第1世代）

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 前年8月に第2世代幼虫が発生したが、平年比少なかった（-）。
- (2) 5月第2半旬現在、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺数は京田辺市及び京丹後市では誘殺を認めておらず（平年並）、亀岡市では平年比やや多い（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は5月第5～6半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ（敷ワラ）を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカとイネ縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年並（前年並）
イネ縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカの越冬虫の発生は山城で平年比多い発生を認めたが（+）、府全域では平年並であった。
- (2) 前年は、巡回調査ではイネ縞葉枯病の発生を認めていないが、一部普及センターから縞症状斑がみられるほ場が散見されるという報告があった。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) ツマグロヨコバイの越冬虫数、確認ほ場率ともに平年比少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4 齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、イネ萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや少なく（－）、京丹後市で平年比やや多かった（＋）。
- (2) 5 月中旬現在、本田での発生量は平年比やや少ない（－）。
- (3) 5 月第 2 半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への初飛来及び誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で誘殺を認めず（平年並）、亀岡市では初飛来が 4 月 2 7 日で平年並（平年：4 月 2 8 日）で、誘殺数も平年並であった。

*** 今後注意すべきその他の病害虫等は p. 14 を参照**

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在の発生量は平年並。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く（＋）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。
- (2) 果実の感染を防ぐため、大袋掛けは小袋が破れる前に必ず行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く（+）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）発病適温は15～25℃である。
- （2）雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- （3）赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。
- （4）幼果や葉に発病を認めた場合、取り除いてほ場外に持ち出して処分する。

3 ブドウ ペト病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く（+）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- （2）発病適温は22～25℃である。
- （3）5～6月に多雨であると多発生となりやすい。
- （4）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- （5）新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

4 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- （1）前年10月の調査では、発生を認めていない（平年並）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く（+）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）角斑落葉病と円星落葉病があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。主な感染時期は前者が6月中旬から7月中旬で、後者が5月下旬から7月上旬である。前年の被害葉（落葉）に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。感染時期の防除を徹底する。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年比やや少ない（－））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く（＋）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉（落葉）や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
- (2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

6 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並（前年並）
カンキツ 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、ナシでは発生を認めず（平年並）、カンキツでは発生を認めていない（平年比やや少ない（－））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並か多く（－）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を連用した園では天敵も減少するため、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統の薬剤の連用は避ける。

7 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) チャバネアオカメムシの越冬量は、山城地域で平年比多く（＋）、丹波地域で平年比やや多く（＋）、丹後地域で平年並。
- (2) 5月中旬現在、ナシでの被害は認めていない。
- (3) 5月第2半旬現在、チャバネアオカメムシの予察灯（BL）への誘殺は京田辺市で平年比やや多く（＋）、亀岡市で平年比多く（＋）、京丹後市で平年比少ない（－）。
- (4) 5月第2半旬現在、チャバネアオカメムシのフェロモントラップへの誘殺は京田辺市及び亀岡市で平年比多く（＋）、京丹後市で平年比やや多い（＋）。
- (5) 5月第2半旬現在、ツヤアオカメムシの予察灯（BL）への誘殺は京田辺市で平年比やや多く（＋）、亀岡市及び京丹後市で認めていない（平年並）。
- (6) 5月第2半旬現在、クサギカメムシの予察灯（BL）への誘殺は京田辺市及び京丹後市で認めず（平年並）、亀岡市で平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来して局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

*** 今後注意すべきその他の病害虫等は p.14 を参照**

チャ

1 炭疽病

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比少ない）
	丹波	平年並（前年並）
	丹後	平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で発生を認めず（平年比少ない（-））、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く（+）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 防除適期は、二番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 もち病

予報内容	発生量：山城	平年並（前年並）
	丹波	平年並（前年並）
	丹後	平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。
- (2) 前年10月は、山城、丹波及び丹後で発生を認めなかった（平年並）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く（-）、降水量は平年並か多く（+）、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- (2) 気温20℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
- (3) 常発地や一番茶摘採後に病葉が認められる園では注意する。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹後 平年並 （前年比少ない）

次世代幼虫ふ化時期：

山城：6月第5半旬～7月第1半旬（平年比やや早い）
丹波：6月第6半旬～7月第2半旬（平年並）
丹後：6月第5半旬～7月第1半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城及び丹波で平年比や多く（+）、丹後で発生を認めていない（平年並）。
- (2) 前年10月の発生は山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後で平年比多い（+）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市及び京丹後市で平年並、綾部市で平年比やや少ない（-）。
- (4) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市及び京丹後市で平年比やや早く、綾部市で平年並。
- (5) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く（-）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月初めで、年4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤が掛かりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (3) ジアミド系及びIGR剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹後 平年比やや少ない（前年比少ない）

次世代幼虫ふ化時期：

山城：6月第3半旬～6月第5半旬（平年比やや遅い）
丹波：-
丹後：-

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城及び丹波で発生を認めず（平年比やや少ない（-））、丹後で平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや少なく（-）、綾部市及び京丹後市で平年比少ない（-）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年比やや遅く、綾部市及び京丹後市では誘殺数が少なすぎるため誘殺盛期を測定できなかった。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く（-）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が一致すると被害が大きくなるので、新芽の生育発生状況に注意する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない	(前年比やや少ない)
	丹波	平年並	(前年比やや少ない)
	丹後	平年並	(前年並)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく(－)、丹波及び丹後で発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並か多く(－)、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。
- (4) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない	(前年並)
	丹波	平年並	(前年比やや多い)
	丹後	平年比やや多い	(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく(－)、丹波で発生を認めず(平年並)、丹後で平年比やや多い(＋)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並か多く(－)、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力は高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

7 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容	発生量：山城	平年並（前年並）
	丹波	平年並（前年比やや少ない）
	丹後	平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後で平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く（-）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。
- (3) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

8 クワシロカイガラムシ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比やや多い）
	丹波	平年比やや少ない（前年比少ない）
	丹後	平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で発生を認めず（平年比少ない（-））、丹波で発生を認めず（平年比やや少ない（-））、丹後で平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く（-）、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除が一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) クワシロカイガラムシの防除適期である幼虫ふ化期は気象条件により前後し、発生状況も変化する。
茶園ごとのクワシロカイガラムシの防除適期が予測可能な「茶生育等予測マッピングシステム」が京都府で稼働中であるため活用する。
* 京都府内の茶園が対象。
使用料：無料

茶生育予測マッピングシステムの概要は茶業研究所のHPのこちら→



登録はこちら→



- (3) 薬剤は株内部の枝に十分かかるように、1000リットル/10アール散布する。
- (4) 冬期にプルートMCを散布した茶園では、薬剤散布の必要はない。
- (5) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p.14 を参照**

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在、トマトで発生を認めず（平年並）、ナスで発生を認めていない。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- （2）マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在の発生量は、平年比多い（+）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- （2）肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病する機会が多い。
- （2）曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- （3）発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

4 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （1）5月中旬現在、ナス及びキュウリで発生を認めていない（平年並）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなりやすい。
- (3) 過繁茂を避け、肥培管理に注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、小株及び大株で発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

6 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在のアブラムシ類の発生量は、キュウリ及びキャベツで平年比やや多く（+）、ナスで平年比やや少なく、ネギで平年並。
- (2) 5月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

7 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、キュウリで発生を認めず（平年並）、ナスでも発生を認めていない（平年比やや少ない（-））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は、キュウリで平年比少なく（－）、ナスで平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等の種類もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は、キャベツで平年比多い（＋）。
- (2) 5月2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で平年比やや少なく、亀岡市で平年並、京丹後市で例年比やや少ない（－）。
- (3) 5月2半旬現在、予察灯60Wへの誘殺数は、京田辺市で例年並、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや少ない（－）。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く（10～12回／年）、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- (2) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (3) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は、小株で平年並、大株で発生を認めていない（例年比やや少ない（－））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギハモグリバエ防除マニュアル（2025年）」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negihamoguribae-manual_202502.pdf



1 1 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は、小株で平年比やや多く、大株で平年比多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiukanjyusei2021.pdf>



技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf



技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf



今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 スクミリングガイ

- (1) スクミリングガイは在来のタニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕うんにより機械的に貝を破碎し密度を低下させることができる。土壌水分が少なく田面が硬くなる水稻収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm未満が大部分なので、耕うん深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして(通常の1/2以下の作業速度が望ましい)いっきに耕うんすると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくすため、水路の泥上げを地域全体で行うと効果的である。
- (2) 苗を移植する前に、田面を細かく耕うんし、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 地区内での発生が一部に限られる場合は、農業機械に付着した泥の含まれる本貝を未発生ほ場に持ち込み、発生を広げないことが重要。作業を行う順番を考慮するとともに、既発生ほ場からの土の移動の危険がある場合には、農業機械の洗浄等の対策を講じる。
- (5) 貝が水稻に被害を及ぼすのは田植後、約3週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cmが理想だが、4cm以下に保つと実害が出にくい(貝は水中でのみ摂食する生態のため)。
- (6) 圃場の均平が重要である。圃場が凸凹だと深いところの株が食害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植前に圃場の高低を修正するとともに、被害が生じやすい田植直後は極く浅水とし(一部の土が水面上に出ても)、徐々に水深を増加させるなどの工夫が必要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

詳細は、令和3年4月2日付け「防除所ニュース令和3年第3号」を参照のこと。

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2021_03.pdf

果樹

1 カキ カキノヘタムシガ、カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

2 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) ハウス栽培では開花前から換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。多発園では2回防除を行う。

2 チャトゲコナジラミ

5月中旬の巡回調査で発生園を認めた。ほ場をよく見回り、発生の多い園では注意する。

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農業協同組合にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター		電話番号一覧
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－